

Not-God

『アルコールリクス・アノニマスの歴史』

Ernest Kurtz (アーネスト・カーツ)

第三章 AAの独立

1937年11月-1939年10月

限界のなかに、全体性を見いだす

Presented by
なかやま ひいらぎ

1

はじめに

第三章の構成

1. オックスフォード・グループから受け継いだのではないAA独自の概念の獲得（底つき・アイデンティフィケーション・脆弱性）
2. ニューヨークにおける資金獲得と職業化の失敗
3. 基本テキストの出版・12ステップの成文化
4. アクロンでにおける分離（四つの分離）

2

病気ではなくアルコールクを

- **アルコールリズム**を直接理解するのではなく、実用的 (pragmatic) に、**アルコールク**とはどんなものか、であり続けた
 - 「霊的な経験だけが克服することのできる病気」 BB 65
これは明らかに病気ではなく、アルコールクを描写している
- アルコールクの問題は**自己中心性**であるという中核的知見
 - 「気がついてはいないが (自分ではそう思っていない) 」 BB 90
——この問題は **本人には自覚されていない**

(3)

アイデンティティ

- うまくいかないケースで障害になっているのは、自分がアルコールクであることを**否認**することにある
- 否認は**二つの相反する主張**として表される
 - 「自分もほかの人と同じように飲めるはず」という主張
 - 「自分だけは**違う**」と言ったり「自分は例外だと考え」たりする
- **アイデンティティ** (自分は何者か) は
 - 人と**共通点**／人との**違い**

(4)

新しく採用された言葉

Not-God 113

- ビルとボブは二つの考えを発展させた
 - **底をつく** (hit bottom) ← **収縮** (deflation)
 - **自分も同じであると認める** (アイデンティファイ・identify) (共感ではない)
- どちらの言葉もその後の15年間AAのテキストには表れない
- 二つの語がAAのなかで使われるようになったときには、AAのプログラムと共同体がどのように始まりどのように働いたかを正しくとらえ、要約する用語になっていた
- この他に**本物のアルコールク・コントロールの喪失**

1938年初頭 —

5

底を突く・底つき(=絶望)

Not-God 113

- **底つき**は仕事や家族を失ったり、草むらで寝たり、もう飲めないと感じたりすることではなく、**真に打ちのめされ、絶望している**感覚、あるいは意識として理解された
 - ビル・W「その時の孤独と絶望はとても言葉では言い尽くせない」 BB 12
- **底を突くこと(=絶望)**に、AAを理解するための本質がある
- **底つき**は内面的な現象(外側の問題ではない)



6

否認を乗り越える手段①

- 底つきが**内面の現象**ならば、その認識を、どのようにしてほかの人に伝えることができるか？
 - 個人的経験、個人の**内面**の経験を語ることによって「自分も同じである」と認められるようにする (identification)
- 根深い否認への対抗薬は、**人間というものは弱いものである** (personal weakness) という深い正直さを吹き込んだ、開かれた、押しつけがましくない語りによって、**同じであると認められる**ようにすること

(7)

否認を乗り越える手段②

- その語りは、見返りなく提供された——自分が飲まないでいるためには、そのような正直さが要求されるから
- AAのプログラムの運び手は、否認の仕組みや利己主義の根っこに直接挑まない (**弱さ**と**脆さ**を提示する)
 - (語りの) 正直さは、語る者の**弱さ**と**脆さ** (vulnerability=脆弱性) に正確に焦点を当てていた

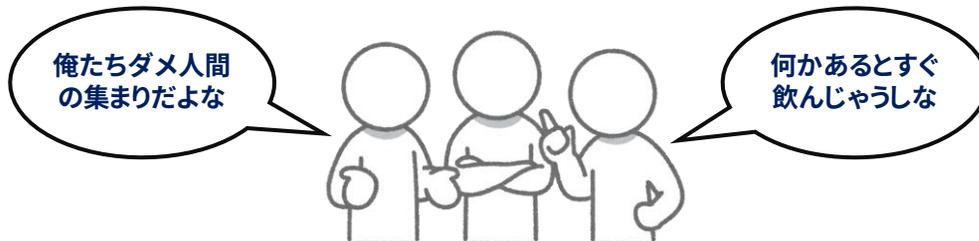
(語り手は) 飲酒によって内面の苦しみに耐えていたが、この語りによってますます弱く脆くなり、その脆さと弱さが聞いている相手にも及んでいく (アイデンティファイをもたらす)

(8)

脆弱性(脆さ・ヴァルネラビリティ)

Not-God 114

- **脆弱性**——日本のAAには伝えられてこなかった、重要な価値
- 「お互いの脆さを公然と認め合う共有された正直さ」
the shared honesty of mutual vulnerability openly acknowledged



(9)

脆弱性(脆さ)を分かち合うとは

Not-God 114

- アルコホーリクにとって**最大の脆弱性**は**スリップ(再飲酒)**
 - 再飲酒の経験を共有する(共通の問題)
 - 何年酒をやめていてもアルコホーリクは本質的にいつ飲み出すか予測できない点で、まだやめられていない人と一緒
 - 次いつ飲むかわからないという**絶望**と**底つき**が共有される
 - (例えそれが病気であるにしても) **飲めばダメになってしまう脆さ**
- 第一章「ビルの物語」pp.7~12

すぐ飲んじゃう

(10)

アイデンティフィケーションの治癒力は 降伏の証人となることから生じる

Not-God 115

- **降伏**という行いと、それを見届ける人たち —— BB 92
 - 降伏——AAのプログラムを掴み取るために必要な基盤となった
 - ビル・Wの降伏は**孤独**に**合理主義を放棄**したことであった
- **ドクター・ボブの降伏**：手術の日の朝に「**それをやりぬく**」
 - 経済的に追い込まれていて、医師としての地位に辛うじて残った残骸にしがみついていた—その残骸を手放すことで**降伏**することができた
 - 自分の降伏に危険なほど時間がかかったためドクター・ボブは**降伏の表明**を劇的に、真っ先にするように求める傾向があった

埋め合わせ

(11)

AA独自に獲得された概念

Not-God 116

- 二つのキーとなる概念
 - **底つき(絶望)**・・・脆弱性（脆さ・ヴァルネラビリティ）
 - **同じだと認める(アイデンティファイ)**
 - 降伏 —— 上の二つの概念と実践をつなぐ
 - ドクター・ボブ式の降伏が必要という情報をNYに持って帰った
- ドクター・ボブの成功（降伏）と、ハンク・Pらの懐疑主義
この二つを両立させることは可能か？——ビルの課題

(12)

事業展開

- 病院、伝道チーム、書籍
 - プログラムはまだかたちを取っていない
 - NYの人たちは、書籍の出版には熱心だった
- ビルはアクロンとの同意の可能性があると思った
 - ドクター・ボブの破産状態
 - 書籍からの売り上げがドクター・ボブを救うだろう

(13)

職業化(の否定)

- ウィルソン家の家計も危機的状況
- チャールズ・タウンズからの申し出
 - 当事者カウンセラーとして、オフィスとまともな報酬を提供する。
- 火曜日のミーティング
 - 「チャーリーの申し出は道德倫理としては正しい。でも私たちが得たものは道德倫理にもとづいたものではない」 —— 後の**伝統8**

実はオファーを受けたのはクリーブランドのクラレンス・Sだった

ビルは後にこれを「the group conscience= **集団の持っている道義心**」と呼んだ

1937年夏 — AACAA 151-154

(14)

事業の資金準備

Not-God120

- 地理的にも人脈的にもニューヨークの責任だろう
 - うまくすれば三つすべて（伝道団・病院・出版）を実現できるかも
- 期待できそうな金持ちのリストを作成して当たったが・・・

「富裕層のなかには少々関心と共感を示す人たちもいたが、本当に興味をもつ人はいなかった。彼らのほぼ全員が、結核、がん、赤十字のほうで慈善投資先としてずっと好ましいと考えていた。自分で勝手に問題を起こして落ちぶれたアルコールクたちを、なんで再生させなければならないのか？ 大きな落胆のなかで、大酒飲みは受けのよい慈善の対象ではないのだと、私たちはようやく知った」

1937年11月 — AACA 223-224
(15)

ロックフェラー・コネクション

Not-God120



William Griffith Wilson
(1895-1971)



Leonard V. Strong, Jr.
(1899-1989)



Willard Richardson
"Uncle Dick"



A. Leroy Chapman



John D. Rockefeller, Jr.
(1874-1960)

- 義弟であるレナード・V・ストロング博士にグチを言った
 - ストロングはウィラード・リチャードソンの親友
 - リチャードソンは敬虔な宗教家であり、ジョン・D・ロックフェラー・ジュニアが個人でもつ慈善団体の管理者

1937年11月 — AACA 224
(16)

ロックフェラーの個人会議室①

Not-God121

● 参加者

- ビル・ウィルソン
- ウィリアム・シルクワース
- レナード・ストロング
- ボブ・スミス
- **ウィラード・リチャードソン**
- アルコホーリク数人
- **アルバート・スコット**（リバーサイド教会の理事）
- **フランク・エイモス**（広報職）
- **ルロイ・チップマン**（慈善団体の管理者）

1937年12月末 — AACA 225-226
(17)

ロックフェラーの個人会議室②

Not-God121

- アルコホーリクが自分のストーリーを話すことを提案された
 - 困窮、不名誉、絶望的な強迫行動、そして断酒と救済（salvation）
 - 深い感動を与えた
 - 司会をしていた**アルバート・スコット**が

ああ、これは**原始キリスト教会**そのものです！ 私たちはどうすればこれを支援できるんでしょう？



1937年12月末 — AACA 226-227
(18)

金銭はこれをダメにする

Not-God121

- ビルが支援を依頼した
 - 有給のスタッフ、病院のチェーン、印刷物への資金 → 賛同
 - アルバート・スコットが・・・
- 議論があったが、
 - **いくばくかの金銭が必要だ**
 - エイモスが調査をして報告書を提出することになった

金銭はこれをだめに
するのじゃないか？



—— 後の**伝統7**

1937年12月末 — AACAA 226-227
(19)

ロックフェラーの5,000ドル

Not-God122

- エイモスがアクロンを訪れて調査
 - 「金銭がこれをダメにする」と確信させた（ヘンリエッタ）
 - 「エイモスは興奮してアクロンから帰り、五万ドルの提供を進言した」（ビル・W）
- 結果としては、**ロックフェラーは資金提供を断った**
 - ただし、妥協策として5,000ドルをリバーサイド教会の基金に入れ、ビルたちが引き出せるようにした（現在の価値に換算して10万ドル）

医学、宗教、偉大な善行の結びつき

1938年2月 — AACAA 229-230
(20)

財団(後の常任理事会)の設立

- **アルコールク財団 (Alcoholics Foundation) 設立**
 - リチャードソン、エイモス、チップマン、ストロングら
 - ロックフェラー以外の富豪からの寄付を期待した
 - 後の**ゼネラル・サービス・理事会 (General Service Board)**
 - **過半数はノンアルコールク**という伝統の始まり (後に議論になる)
- **だがまったく金が集まらなかった**

計画は潰えたがまだ本を出版する計画は残っていた

1938年春 — AACCA 233
(21)

ビッグブックの執筆①

- **ビルは書き始められなかった** — あらゆることを盛り込もうとした
 - ドクター・ボブは、いつものように「シンプルにしよう」
 - エイモスとチップマンは**資金集めのための広報資料が必要だ**
 - 1937年12月のロックフェラーの集まりでのメンバーの話が興味を引いた
- **ビルは、「ビルの物語」と「解決はある」を書き上げた**
 - 第二章の「解決はある」が、「ビルの物語」より先にできていた
 - ビル・W **「メンバーのストーリーがこの本の心臓部になる」**

1938年春 — AACCA 233
(22)

ストーリーを語る

- もともと、宗教的にも、心理学的にも、何かを**告白** (confession) することには効果があることが知られていた
- オックスフォード・グループでの告白は
 - プライベートな「罪の告白」+公衆の面前での「**証し**としての告白」
- OGから分離したアルコールクたちは、何を話すか
 - 候補生たちを前に**アイデンティフィケーション**をもたらす語り
 - 「**物語**」を語ることの繰り返しがAAにおける治療の中核的な実践 the core therapeutic process となった → 書籍もその延長

(23)

出版社の設立

- ハーパーブラザーズ出版社の編集者ユージン・エクスマンとの会談
 - ビル・Wに対し1,500ドルの前払い金を約束
 - ニューヨークのグループも「自分たちの本を持つべきだ」
- 収入を想定して、株式会社**ワークス出版社**が設立された
 - → 1953年 AA出版社 →1959年にAAワールドサービス社
- Worksは当時よく使われていた It Works! 「うまくいく」から
 - アクロンの人々にとっては聖ヤコブの言葉 → 出版に前向きに

1938年秋 — AACA 234-235, 238
(24)

ビッグブックの執筆②

- ビル・Wが各章を執筆、火曜日のミーティングで読み上げ
 - ドクター・ボブにも送った
 - 熱い議論が巻き起こったが、ともあれビル・Wと100人近いアルコールがソブラエティを達成したプログラムを、**ビルが書き下ろした**

『ドクター・ボブの最後の講演』

「私は12のステップを書いていない。執筆作業には何も関わっていないんだ。おそらく私は間接的に何かをしてはいると思う。なぜなら、6月10日の出来事があってから、ビルは私の家に住んで3か月を過ごし、その間、午前2時や3時までこれらのことを議論しなかった夜はなかったからだ・・・」

1938年の終わりの数ヶ月から1939年にかけて — AACA 242-243
(25)

ビッグブックの執筆③

- ある夕方「全く霊的な気分ではないときに」

- 「どうすればうまくいくのか (How It Works) 」

オックスフォード・グループから学んだことを要約したもの

1. 私たちは、私たちが破滅したこと、アルコールに対して無力であることを認めた。
2. 私たちは、私たちの欠点あるいは罪の棚卸しを行った。
3. 私たちは、信頼のおけるほかの人に私たちの欠点を告白し、分かちあった。
4. 私たちは、私たちの飲酒で傷つけられたすべての人に償いをした。
5. 私たちは、金銭や名誉を求めずに、ほかのアルコール依存症者を助けようとした。
6. 私たちは、この教訓を実践させる力をもつと思われた何らかの神に、それがどんな神であれ、祈った。

あまりにも説教臭く、善人ぶっている

1938年12月 — AACA 244-245
(26)

最初に書かれた12のステップ

Not-God126

- 誰もが同意できるような希望に満ちたテーマにもとづくもの
 1. 私たちはアルコールに対し無力であり、思いどおりに生きていけなくなっていたことを認めた。
 2. **神** God が、私たちを正気に戻してくれると信じるようになった。
 3. 私たちの意志と生き方を、**神の配慮と指図** direction にゆだねる決心をした。
 4. 徹底して、恐れずに、私たち自身の棚卸しを行った。
 5. 神に対し、自分に対し、そしてもう一人の人に対して、自分の過ちの本質をありのままに認めた。
 6. こうした性格上の欠点全部を、神に取り除いてもらうことを**心から願った** willing that.
 7. 私たちの短所を**何一つ留めずに** holding nothing back、取り除いて下さいと、**跪いて** on our knees 謙虚に神に求めた。

1938年12月 — AACA 244-245
(27)

最初に書かれた12のステップ

Not-God126

8. 私たちが傷つけたすべての人の**完全な** complete 表をつくり、その人たち全員に進んで埋め合わせをしようとする気持ちになった。
9. その人たちやほかの人を傷つけないかぎり、機会あるたびに、その人たちに直接埋め合わせをした。
10. 自分自身の棚卸しを続け、間違ったときはただちにそれを認めた。
11. 祈りと黙想をとおして、**神との(意識的な)** 触れあいを深め、神の意志を知ることと、それを実践する力だけを求めた。
12. これらの**一連の行動** this course of action を経た結果、私たちは**霊的な経験**をし、このメッセージを**他の人たち、特に** others, especially アルコホーリックに伝え、そして私たちのすべてのことにこの原理を実行しようと努力した。

(28)

ビッグブックの執筆④

- ビルは、ニューヨークの（反宗教的な）メンバーにも、まだオックスフォード・グループと結びついていたアクロンのメンバーにも受け入れられるように意識的に努力した
- 6つを12に増やしたのは、「合理化癖のあるアルコールクがごまかせる抜け穴をいっさい残さず、可能なかぎり明確でわかりやすいものにするために、六項目の真実を、さらに小さく噛み砕いた」

12使徒と同じ数

1938年12月 — AACA 246
(29)

論争と決着

- 論争がすぐに始まった
 - **保守派**：字義どおりの意味で、キリスト教の教理でなければならない
 - **リベラル派**：神という言葉には反対しないが、ほかの神学的命題には断固反対——これが多数派
 - **急進派**：不可知論者や無神論者たち。本全体から神という言葉を取り除き、心理学的な本にするように求めた
- 全員を満足させるのは無理

最終判断はビルに任せる

1938年12月 — AACA 246-250
(30)

本の始まりと終わりをどうするか

- **始まり**は問題なかった — **ビル自身の物語がAAの始まり**
- **終わり**をどうするのか — **ビッグブックの実質的な結論は何なのか？**
 - 「その時まで、神の祝福と守りが、いつもあなたにありますように」
・・・これでは説教臭すぎる
 - 「医師の意見」を巻末に置くという代案 —— 寄稿されてみると、祈りと「精神的高揚」で締めくくられていた → 序文に回された

1938年12月 — AACAA 250
(31)

ストーリーを語ること

- プログラムに効果があるのは、酒をやめたアルコールクが自分自身の物語を語るから・・・ **物語と事例を後半に置く**
- ストーリーを語ることは
 - 間接的には（プログラムが機能したという）「生きた証」
 - より直接的に **プログラムを機能させる原理そのもの** という発見!

オールドタイマーが本の内容をどうするか議論ばかりした結果
 ニューカマーが酒をやめられなくなった

1939年はじめ —
(32)

ストーリーを語ることの持つ機能

12ステップへ誘導するための語り

● ストーリーを語ることの持つ機能

- 「飲んでいた頃を思い出す」——まだ酒が切れたばかりの人に対して
- 「このプログラムには効果がある」という撒き餌として 問題と解決を提示する

遠い過去のことではなく

● すでに「12番目のステップの訪問 call」は実践されていた

- 新しい人はほとんど入ってこなかった 複数のメンバーで候補者を訪問する
- Exceptionalism — 「私は違う」「あなたたちは違う」という反応

アイデンティフィケーションを成り立たせないとならない

対策として、訪問時に複数の人がストーリーを語るという実践

(33)

ストーリーセクションの持つ意味①

- ビッグブックの後半においたのは、単なる思いつきではない
- ストーリーを語ることは、12ステップの成文化以前に「12番目のステップの訪問」で実践され、実証された経験的手法
- How It works (どのように効くのか) はプログラムの核心
 - それに先行する問い：“How do you get it to work?” (あなたはこれを効くようにするのか=あなたはこのプログラムで回復したいのか) は、かつての酒飲みによって提示されるほかない

(34)

ミーティングの形式の変化

アクロンでは複数が話すというかたちもあった

- one-speaker discussion meeting
 - ニューヨークでは、**一人のスピーカー**とウィルソンだけが話す形式
 - アクロンやクリーブランドでも、**一人のスピーカー**が話すのが主流
- **多くの人**が話し、**対話のない**AAミーティングの形態
 - 「12番目のステップの訪問」から生じてきたと考えられる
 - 訪問では一人ではなくなるべく沢山のメンバーが訪問して自分の物語を語った
 - これがミーティングの一つの形式になるのがいつ頃起きたのかは不明

「AAが発展期に入って、おそらくは複数のことなる場所で同時に起こったのだとみておくのが適切と思われる」

(35)

ストーリーセクションの持つ意味②

- AAでソブリエティを得たメンバーの多様性を示すため
- 実際には**多様性の限界**から理解できることも多い
 - 28のうち少なくとも19話が**明らかに中流層**だった
 - 「AA第三の男」ビル・D（掲載されなかった）中流階級上位・平均以上の教育・若いときの宗教教育・社会的名誉ある地位の放棄
- **「きちんとした中流階級」の人々にプログラムを届ける**

落ちぶれた浮浪者というイメージを呼び起こすと、
AAのプログラムは人をひきつけなかった

(36)

書名を決める

- すでに1938年10月までには団体の名として *Alcoholics Anonymous* を使っていた
- ビルは「BW運動」—— 反対されて引っ込めた
- 希望を伝えることが最も大事 *The Way Out*（困難からの脱出口・解決）— アクロンの支持を得ていた
- 米国議会図書館に所蔵されている本の題名の調査をした
 - *The Way Out* 25冊 / *The Way* 12冊 / *Alcoholics Anonymous* なし

1939年初め — AACA 253
(37)

400部の貸し出し見本

- 宗教と医学の二つから由来していることから、医学的誤りや宗教に対する攻撃が含まれていてはならない
 - 簡易オフセット印刷で、**400部の貸し出し見本**が作られ、発送された
- ニュージャージー州の精神科医ハワード博士からの指摘
 - you must（あなたは～しなければならぬ）→ we have（私たちは～した）
- ニューヨーク大司教管区の出版委員会から
 - 「天国を見つけた」とあるのを、「楽園 (Utopia)」に

1939年初め — AACA 255-258
(38)

妥協

Not-God136

- ハンク・Pとジム・Bら少数の急進派の批判
- クリーブランドの**カトリック**の司教から、カトリック以外の宗教的集会に行くためにアクロンに行くのは認めない
- ウィルソンは妥協を受け入れ
 - ステップ2では神を「自分を越えた大きな力」と表現
 - ステップ3と11では「自分なりに理解した」という言葉を挿入
 - ステップ7から「ひざまずいて」という表現を取り除いた

これは「提案」だという書き換え

1939年初め — AACA 259
(39)

出版はしたものの

Not-God137

ビッグブック

- 値段は\$3.5 — 高いと言う人をなだめるために厚い紙で印刷
- 『リーダーズダイジェスト』での紹介記事は実現しなかった
- 銀行が抵当権を行使し、ビルとロイスは家を退去した
- 1939年の夏の間、広報の試みはすべて失敗した
- ハンク・Pが被害妄想に陥り、再飲酒
- エビーも再飲酒した

出版はプログラムの確立を意味

1939年4月～秋 — AACA 260-272
(40)

同時期のアクロンでの動静

- 四つの分離
 - まずオックスフォードグループのアルコールクがそこから分離
 - アクロンの本拠地に通っていたクリーブランドのメンバーの分離
 - ドクター・ボブのアルコールク治療がアクロン市立病院から分離
 - オックスフォードグループという組織からの、アルコールクス・アノニマスの自覚的な分離

(41)

クローズドミーティングの発生

線引き

- ニューヨークのビルの自宅でのミーティング
 - 妻たちも参加する「通常ミーティング」
 - そのあとに、ビル・Wに直接質問したいアルコールクたちは2階の小さな居間に集まった　これがクローズド・ミーティングの始まり
- 1937年11月のビルとボブの話し合いのあと、
 - アクロンでもオックスフォード・グループのミーティングのあとで、アルコールクだけで短時間集まるようになった
(「降伏する」ための集まりと解釈されているところもある)

(42)

クリーブランドの分離①

- 1938年初頭には、クリーブランドから毎週水曜日の夜に人々がアクロンに通い始めていた

アクロン市立病院でドクター・ボブの治療を受けた後、数週間アクロンに留まって、仲間たちと過ごした。その後、クリーブランドから往復75マイル（120Km）を車で旅をしてミーティングに通うようになった。1939年初頭までには、クリーブランドの12人のうち9人がアクロンに通っていた。

- その半数がカトリックだった —— アクロンで行われているのはプロテスタントの礼拝では？
- ついに司祭がアクロンのミーティングに行くことを禁じた

(43)

クリーブランドの分離②

- 1939年3月10日のアクロンのミーティングを最後に、**クリーブランドはグループとして独立した**
 - **クラレンス・S**は人をイライラさせる性格だったので、彼が出ていくことを誰も残念には思わなかった
 - すぐにクリーブランドでも問題が起こると思われ、その通りになったが、それでもアクロンに戻ったり、オックスフォード・グループと元通りになろうという人はいなかった
 - 4月にはビッグブックが入手可能になり、クラレンス・Sはその名前をグループに使うようになった —— **AAを名乗った最初のグループ**

(44)

アクロン市立病院から聖トーマスへ

Not-God 141

- ドクター・ボブはアクロン私立病院と緑十字病院で治療
- アルコホーリックの入院は嫌われた — それは偏見によるものではなく、**アルコホーリックが治療費を払わない**ということによる
 - 二つの病院で未払いが5,000ドル
- カトリック系の施設である聖トーマス病院の客員スタッフに
- **聖アウグスティヌス修道女会のシスター**に、自分がアルコホーリックであることを告白し、アルコホーリックを治療したいと相談した → 「急性胃炎」という名目で入院させた

(45)

シスター・イグナシア

Not-God 142

- シスターは、これがオックスフォード・グループとつながっていることは公にできない
- 聖マルチン教会の若い助祭に問題をもちかけた
- **ビンセント・ハース**神父は、キングススクールでのミーティングに参加
 - 「原始キリスト教会」というより「初期のフランシスコ会のような運動」だと感じた
- 以降スミス医師の活動は土台から守られた



Mary Ignatia Gavin, 1889-1966

(46)

主導権争い

- アクロンのOGではアルコールが増加
- にもかかわらずオックスフォード・グループの人たちは主導権を手放そうとしなかった
 - 「静かな時間」を使ってアルコールへの集団指導を行った
—— アルコールの不満の高まり
- ビッグブックが出版
 - プログラムを「商品化している」という非難

(47)

OGからの完全な分離

- 三人の女性 — 「それは女性達が決めたことだった」
 - クラレス・ウィリアムズ
 - ヘンリエッタ・セイバーリング
 - アン・スミス
- 1939年10月には、ほとんどのアルコールはウィリアムズ夫妻の家でのミーティングを離れた
 - ドクター・ボブの家で → キングススクールでのミーティング

三人の友情は壊れ、
ボブはアンに従った

ボブは恩義を感じすぎていて分離を決められなかった

(48)

OGからの完全な分離

- 三人の女性 — 「それは女性達が決めたことだった」
 - クラレス・ウィリアムズ
 - ヘンリエッタ・セイバーリング
 - アン・スミス
- 1939年10月には、ほとんどのアルコールリクはウィリアムズ夫妻の家でのミーティングを離れた
 - ドクター・ボブの家で → キングススクールでのミーティング

三人の友情は壊れ、
ボブはアンに従った

ボブは恩義を感じすぎていて分離を決められなかった

(49)

独立

- 1939年10月終わりにはAAという存在は明確になった
 - プログラムについて述べた本も出版された
 - もっとも重要なことは、「アルコールクス・アノニマス」という名前のみを掲げて、新しい都市〔クリーブランド〕で成長したグループが一つあって、それはAAの共同創始者のどちらからも直接の刺激を受けなかった（プログラムのみによってグループが増加した）
- 課題もあった
 - 本の出版以外の資金調達／OGとの緊張関係

(50)

道半ば

- **自分たちに限界があり、他者が必要である**ということを学んだ
- いまや成長だけでなく、**成熟が必要**だった
 - 個々のメンバーの飲まない生活（ソブラエティ）が個人の事情や準備段階を待ってくれないように、AAの成長は、その成熟を待つはくれなかった
 - AAはプログラムとしてのさらなる発展の段階を開拓していった

(51)

ご静聴、ありがとうございました。



from *Back to Basics – AA Beginners Meeting*